

大宰府アカデミー・令和編 第6講 令和5年9月20日(水)質問及び回答(Q&A)

「大宰府の出土文字資料」

講師・回答:酒井 芳司氏

(九州歴史資料館参事補佐、学芸員)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 前回(第5講)の佐藤信先生のお話の中で、大宰府から平城京へ向けて送られた木簡は(敢えて)広葉樹の材を使用していたとのことでした。酒井先生はその理由をどのようにお考えでしょうか。

A/ 回答

たしかに、都で出土する西海道諸国からの木簡には、ほぼすべてに広葉樹が用いられています。これらは諸国ではなく、大宰府で作成されたものと考えられます。一方、西海道諸国から大宰府に送られた木簡には、ほぼ例外なく針葉樹が用いられています。つまり、九州で作成された木簡に、広く広葉樹が用いられていたわけではなく、広葉樹の木簡は、大宰府から京進されるもののためだけに作成されたのです。

さて、その理由については、ほかに類例もないことからよく分かりません。ただ、広葉樹は針葉樹に比べて堅牢なことから、製作・加工が難しいかわりに、繊細、丁寧な文字を書くことができます。つまり、そうした木簡を作るために敢えて広葉樹を用いたと考えられます。

私は、平城宮跡から出土した大宰府からの木簡のなかに「筑紫大宰進上……」と記されたものがあることに注目しています。この「筑紫大宰」とは「大宰府」の前身に当たる古い表記で、そこに大宰府、あるいは筑紫大宰が、京に進上することに特別な意味をもたせていたのではないか、そのためにわざわざ広葉樹の木簡を用いたのではないか、と考えています。

Q/今回の講座では、木簡などの出土文字資料を中心に興味深いお話を伺うことができました。そこで質問ですが、そもそも日本人が漢字を使うようになったのはおおよそいつ頃からのことでしょうか。

A/ 回答

これもはっきりした年代を示すことは難しいのですが、次のように考えられています。

日本列島における漢字の使用例は、早くは志賀島で出土した金印「漢委奴国王」がありますが、これは当時の日本人が漢字を使ったものではなく、西暦 57 年に、後漢の光武帝から贈られたものがこれに当たると考えられています。

漢字と漢文体、また固有名詞には音訳を用いて、まとまった文章を綴ったものとしては稲荷山古墳出土鉄剣銘があり、これにみえる「辛亥年」は西暦 471 年と考えられており、こうした形を日本列島における漢字使用の始まりと位置づけてよければ、それはおおよそ 5 世紀ということになります。

こうしたなかで、その書写材料として木簡が用いられることになるわけです。現在のところ、木簡の確実な使用例としては七世紀以後のものしか確認されていませんが、私は講座の中でも申し上げましたように、日本書紀の記事などから 6 世紀半ばからではないかと考えています。

※ ご質問ありがとうございました。